

研究の槩

日本古建築研究の槩 (第十六回)

工學博士 天 沼 俊 一

第二十五 花 瓦 (上)

疏瓦の例に倣ひ、あの順序に書物から引張り出してかいておく

『三才圖會』

花瓦 和名陶布  
美加和良 今云唐草

唐草瓦 卽花瓦也牝瓦端作水草文故名唐草略

似鑑形中古以來甚扁不似鑑蓋見古瓦窄而不如今

『言海』

からくさーガハラ(名) 牝瓦ノ端ニ唐草の模様  
アルモノ、簷頭ニ用キル。花瓦 古製ノ形ハ鑑  
ニ似タリ、因テ鑑瓦ノ名モアリ

『工業字解』

花瓦 音化蛙上壁  
クワクワ 鑑瓦 「和名抄」——ハ鑑瓦也あ

ぶみかはらト訓ス古言ナリ今俗ニ謂フ軒唐草瓦

ナリ 瓦ノ一端を折り曲ケ底ニ唐草ノ飾ヲ盛リ上

ケタルモノ

『日本建築字彙』

……唐草模様アル軒先瓦ナリ。又之ヲ花瓦若ハ  
 鎧瓦トモイフ。今ハ無地ナルモノヲモ便宜上唐  
 草瓦ト稱ス。棧瓦葺ノ軒先ニアルモノヲ棧唐草  
 トイフ。其他平唐草、隅唐草、櫓平唐草、重箱  
 唐草ナドアリ

とあつて、四つとも同説であるから始末がいゝ。  
 たゞ念のため斷つておくが、『工業字解』の説明中  
 「甍の一端を折り曲げ云云」とあるのは、言ふ迄  
 もなく形容で、折り曲げた様に見えてゐる部分即  
 ち瓦當を豫め造つておき、あとから女瓦の一端を  
 其裏の適當なところに當てがひ、土をもつて其の  
 二つをつけて一つとして焼いたものである。折り  
 曲げることは事實出來ぬのである。

こゝに『花瓦』といふは、右に諸書から引いた様  
 に普通の所謂唐草瓦を指すのである。前々號に於  
 いて私は巴瓦と稱するものゝうちにも巴紋のつい  
 てゐぬのがあるし、鬼瓦と異り此の場合には疏瓦

といふ名があるのだから、其名の方が巴紋のつい  
 てゐぬのにも適するからさうしておくど書たが、  
 今も同じ理由の下に花瓦なる名稱を用うる事にし  
 た。そして「アブミカハラ」と訓むことにした。

尤も疏瓦のことを「あぶみ瓦」といつたのもある

やうである、一例は法隆寺南大門疏瓦の一に

南大門の瓦(南大門の事)ニツクルナリ(二度)

コノ瓦(後)ヲノチノヲイツクリノトキ(追造)

ツクルナリハシメワエイキヤウ八ネン(初)(永享)

トシツクルコレワ永享十年(戊午)七月

ツクルナリヲイツクリノフン(追造)(分)

四千八百枚ツクルナリ

あぶみ瓦九十枚の内

永享十年(戊午)七月六日

瓦大工壽王三郎

とあるからである、併し此れはこの瓦をつくつた  
 壽王三郎といふ瓦師が、疏瓦を瓦當を下にして立

てると一寸鑑の様な氣がするのでさう言つたのかも知れないと思ふ。だから一般に其名で通用したかどうか判らぬ。

\* \* \* \* \*

左に前例に倣ひ、先づ以て花瓦に現はれたる文様と時代との關係を記すから、第九十八圖を参照され度いが、其前に少しく書いておく事がある。即ち此の圖以下第百〇六圖迄のは、全部實物からの寫生ではない上に、何れもが圖の様に完全無缺

ではなくて、缺はて亡くなつた部分もあれば文様の磨滅して判らなくなつたのもある。夫れを其通りかくのがいゝのであるが、讀者諸君子が何れも専門家でない以上、反て判りにくゝはあるまいかと思つたので、私の一存で便宜復原をしてしまつた、だから觀らるゝ通り何れも新らしい焼きたての瓦の様であるのである。其復原圖も所謂「推測復原」(conjectural Restoration)であるから、其事を斷つておく。

文様の種類	時代	備考
一 忍冬(?)唐草	飛鳥・奈良	勿論忍冬かどうか判らぬが假にかく呼んでおく。飛鳥が最も雄健で奈良になるまで大分軟かになる。奈良後期以降には、これから脱化した唐草が盛に流行したが、余り形が遠つてゐるので、其の系統とは思へぬ位だが、後には同じものとして論ずることにした。第百〇一圖参照。
二 ユキノシタ(虎耳草)唐草	飛鳥	朝鮮傳來(であらう)。これも亦ユキノシタか何か判らぬが、大概似てゐるので假に名付けたのである。
三 重弧紋	飛鳥以降	弧の數三より六に至る。平安時代に入りては唐草と共に復合紋をつくる(大和・青木庵寺)。
四 葡萄(又は莓)唐草	奈良前期	其前記に限られたるものゝ如く、葡萄が莓か判らぬ様なものもあるが、種類は余り澤山はない。
五 疊布紋	同上	右を疊んだものから來たと思はるゝもので、いふ迄もなく外國種であるが、我國では法隆寺金堂天蓋及び同寺塔婆内舍利塔天蓋側面の文様に密接な關係があるを認めらるゝもの。最も稀な種類、第九十八圖(㉔)及第百〇五圖(㉔)参照。

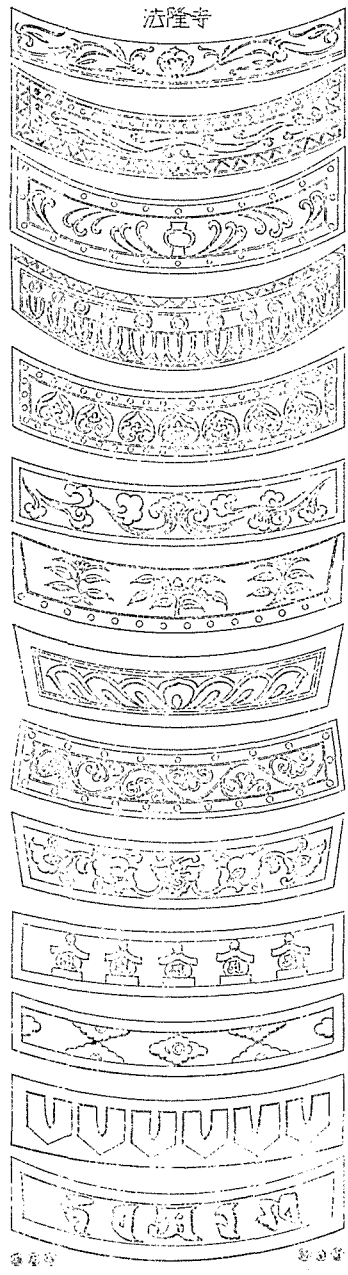
一七	復合紋	平安以降	第九十八圖⑨の如く、長い葉柄のある潤葉が中肋に沿ひて二つに折れ裏面を現はし、葉柄の末端は巻縮して渦さなり、全體前方に彎曲して一種の曲線をなして二つ相對せる文様。これを少しづつ隔て、瓦當に並べたもの。奈良後期に限る様である。
一六	漢字	平安以降	奈良以前及び平安以降にはない様である。
一五	梵字	平安・鎌倉	寶相花の開花したのを中心飾とし、左右に雷又は葉を配したものを。大して珍らしくもないが、またさう澤山もない。
一四	劍頭紋・劍巴紋・巴紋	平安以降	圓案化せる寶相花―花菱―を散し模様としたもの。第九十八圖⑨
一三	金剛杵	平安	莖及び葉を備へた草花で、満開のものを中央に、半開のものを左右に配したもので、何れも花の側面を現はしてある。稀有。
一二	蓮花紋	平安	平安時代後期のは中に上等であるが、鎌倉のは左程でない。室町から細くなり出し、桃山江戸で駄目になる。
一一	蓮花唐草	平安以降	瓦當全體に満開蓮花の側面をつけたもの。稀有。
一〇	草花	平安	他時代のもの未だ發見されぬやうである。稀。
九	寶相花散	平安	室町位までである。連續又は少しく間隔をおいた劍頭紋、外擦せる巴紋、又は巴紋が二つ又は三つづつ、吹き寄せに配置されたもの、或は巴劍紋等、其紋の大きいのや小さいのや、肉太なのや細いのや、上を向いたのや下を向いたのや、また紋様が浮き出しているのや、陰刻してあるのや、其種類極めて多く、即ち多種多様である。
八	寶相花唐草	奈良以降	五大の種子(キヤ・カ・バ・ア)又は四天總咒(オン・ア・ウン・ヲ・ケン・ソ・ヤ・カ)等を陽刻したものである。
七	雲紋	奈良・平安	人名・寺名・建立の年月日等を瓦當に現す。最古の一例は大和國青木庭寺出土のもので、左文字で「延喜六年造極越高階茂生」とあるものである。
六	對葉紋散	奈良後期	最古のものは漢字同様青木庭寺出土のもので、三重の輪廓―重弧紋ともいふべき―をさつた内に唐草を入れている。だからこれは重弧紋と唐草との復合紋といへる。此意味に於いては、右に記した延喜六年のもの、三重輪廓内に文字があるのだから、この中へ入れてもいいかも知れぬが、これに比べる輪廓が大分に細かいから、別にした方がよさうである。動物と植物―鳳凰と蓮花―との復合紋には鎌倉時代で額安寺出土のものに珍らしい例がある。

一八	菊水紋	鎌倉以降	後に記す様に、蓮花唐草の中心飾たる蓮が菊花になり、左右に出た唐草が千切れ千切れになつて波紋に變化したので、即ち純粹の菊水紋が出来たのである。これがもう一變化したので、菊花散しの間に波紋のあるもの、換言すれば波の間に菊花の浮べる意匠がある。
一九	菊花紋	鎌倉以降	菊花の左右に苗葉を添へて用いたもので、余り澤山はない様である。室町の例は未だ知らぬが、桃山にまた出てくる。
二〇	幾何模様	鎌倉以降	珠紋の並列、又は方形を對角線の方向——四半——につないだ様なもの等。
二一	浪	室町以降	一八に記した菊水紋の菊が消滅して水ばかりになつたところへ、風が吹いて來たので水面に大浪がたち、立派な波浪紋が出来上つた。かうなるまで伏せの紫原になる見え盛に用ひられ出た。今でも普通にある棧瓦の面に波の文様のあるのは、これ等が更に發達して繪畫的になつたものであらう。
二二	桐	桃山以降	桐の散し模様。多くは三つ並べる。時には三つ並べた其兩側へ唐草の痕跡を残したのもある。
二三	橘	桃山以降	圖案化した橘實をつけたのは聚樂第位が初めてではあるまいぞ。
二四	鳳蝶	桃山・江戸	疏瓦のと同じ様に飛翔せる状態がつけてある。
二五	紋章	桃山以降	疏瓦の場合程盛ではないやうである。
二六	其他		何れにも入らぬもの、例へば廢地光寺出土の様なのをに入れておく(第九十八圖は)

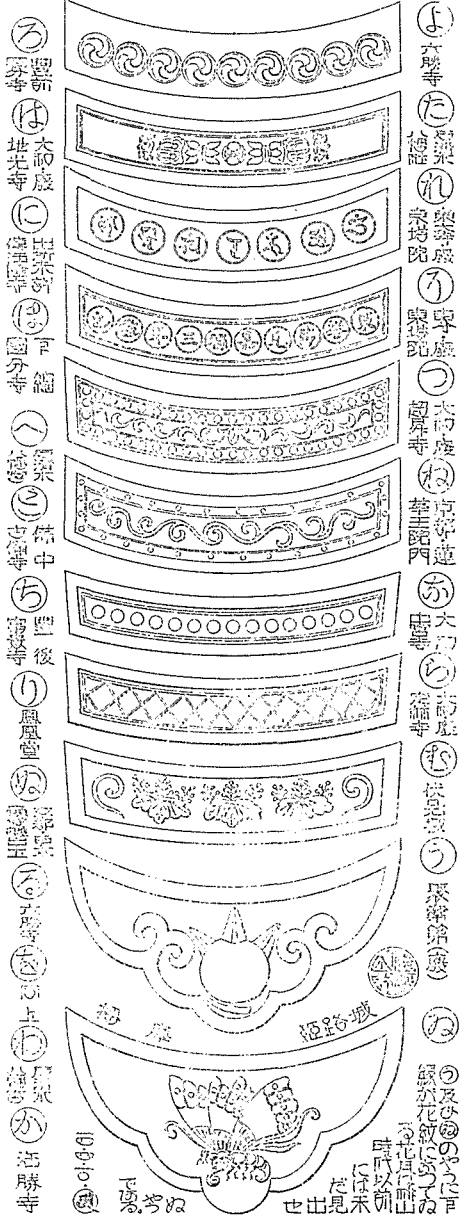
先づこの位なものであらう。幸にして人面の様な要領を得ないものもないし、先づは無難である。次にまた疏瓦の時と同じ様に實線及び破線を以て一目瞭然の表を作つてみる。

此の表中で少しく怪しいのは最後の欄の「其他」

である。此の欄は疏瓦の時には省いておいたが、ごうも入れた方がよささうであつたから、今度につけたのである。併し確かに各時代に少なくとも一つづつは「其他」に入れべき種類の文様があるかごうかは知らないで、多分あるだらうと勝手に



第九十圖・花月十八種



① 六勝寺  
 ② 興隆寺  
 ③ 興隆寺  
 ④ 興隆寺  
 ⑤ 興隆寺  
 ⑥ 興隆寺  
 ⑦ 興隆寺  
 ⑧ 興隆寺  
 ⑨ 興隆寺  
 ⑩ 興隆寺  
 ⑪ 興隆寺  
 ⑫ 興隆寺  
 ⑬ 興隆寺  
 ⑭ 興隆寺  
 ⑮ 興隆寺  
 ⑯ 興隆寺  
 ⑰ 興隆寺  
 ⑱ 興隆寺

① 興隆寺  
 ② 大和屋  
 ③ 大和屋  
 ④ 大和屋  
 ⑤ 大和屋  
 ⑥ 大和屋  
 ⑦ 大和屋  
 ⑧ 大和屋  
 ⑨ 大和屋  
 ⑩ 大和屋  
 ⑪ 大和屋  
 ⑫ 大和屋  
 ⑬ 大和屋  
 ⑭ 大和屋  
 ⑮ 大和屋  
 ⑯ 大和屋  
 ⑰ 大和屋  
 ⑱ 大和屋

法隆寺

① 及び②のやに戸  
 ③ 及び④の花飾に於ては  
 花月十八種  
 ⑤ 及び⑥の  
 ⑦ 及び⑧の  
 ⑨ 及び⑩の  
 ⑪ 及び⑫の  
 ⑬ 及び⑭の  
 ⑮ 及び⑯の  
 ⑰ 及び⑱の

きめたのである、だから怪しいのであるが不取敢  
飛鳥を除いた全部へ縦線を引いておいたのであ  
る。

中心飾

疏瓦の蓮花紋に就いて記した際には、分類が出  
來たからやつてみたが、どうも今度はさういきか  
ねるからやめて中心飾に就いて書いてみる。花瓦  
は疏瓦と異り「中心飾」とも呼ぶべき一種の裝飾が  
瓦の中心についてゐる場合が多い。其裝飾は當初  
所謂忍冬模様の中心にあるもの——第九十九圖⑤  
⑥⑦⑧。第九十八圖⑨。第百〇一圖⑩には其全形が  
ある——から、段々に少しづゝ變化していつたど  
考へられるのである。夫れは第九十九及第百の二  
圖をみれば自然に判るであらう。

併し勿論所有中心飾の祖先是第九十九圖⑥や⑦  
ではない、忍冬は忍冬としても別種のから來たと  
思はれるのもある、例へば同圖⑨の如きは玉蟲厨

子宮殿通肘木の裝飾文様に發したと考へられぬ事  
はないであらう。ずつと簡單なものは第百圖⑩ま  
た此の系統である。同圖⑩も亦然りで、⑪が中央  
で二つに切れ、又は前圖⑫が、何れも其先が二つ  
に割れて兩方へひつくり返つたとすれば此れにな  
る。だから⑬・⑭・⑮は同じ系統と言へる。第九十  
八圖⑯の如き對葉散し模様の各々は、これもまた  
⑮に少し細工をすると極めて容易に出來上るので  
ある。

第九十九圖に於いて、實際はさうであつたかご  
うか今日からは判らぬが、かういろいろ並べて圖  
をかいてみると、次の様な考へが出てくる。即ち  
⑮が一番古く、夫れを少しかへて賑かにすると⑯  
になる、だから前者の次に後者が出來たのであら  
う、其⑯をまた少し筆先でいたづらをしてゐると  
⑰になつて了ふ。此れは容易に⑱になる。⑲はこ  
れから來たとも一つおいた⑳から來たとも考へら

れる。㊦以下次圖に至るまで、㊧・㊨・㊩及び㊪・㊫  
①等を除いては何れも此れ等に隸屬してゐるのである。右に記した對葉紋等も㊬から來たとも考へられるのである。だから廣い意味に於いては、古へより今に至るまで、多くの中心飾は飛鳥の所謂「忍冬」系統であると言ひ得ない事もあるまい。

夫れで此れ等の中でも特に㊬・㊭・㊮・㊯・㊰等は第百圖の二なる法隆寺藏佛像背光破片の透彫の内上部にありては光心の周圍、下部にありては中心無紋の圓板の左右に二つづゝ繰り返してゐる對葉紋、また裝飾畫では唐招提寺金堂大虹梁にある寶相華唐草の内、又は榮山寺八角圓堂天蓋六瓣花の各花瓣等に於ける文様は、何れもこの種のものである。此れ等はほんの一例に過ぎぬのであるが、一は瓦の文様の一部であるため、さう精密にはいかないのと、他は木彫又は繪畫であるため、比較にならぬ程精巧の度を増してゐる丈けの差で、全

然同一の意匠である。是れに由りて之れを觀ても一時代に用ひられたる文様の性質は同一である事が判るであらう。他は類推すべきである。

第百圖の㊱・㊲・㊳の様な蓮華紋を中心飾としたのは、所謂忍冬とは別に取扱ふべきである。蓮華を中心につけたのは、遺物からは平安後期に始らしい、寶相華唐草は奈良時代からあつたのだから、そして古い時代には蓮も寶相花も同じで、一つ幹から兩方が出てゐたりした繪がある位だからそんなところから蓮唐草を考へ出したのかも知れぬ。後に記すが蓮華が次第に變化して、しまひには蓮から變つたのかどうか判らない様なものになつて了つたのである。江戸時代の瓦の中心についてゐる楓葉は正に蓮華の變化とみるのがよからうと思ふ。

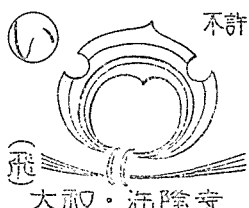
以上中心飾について記述したが、花瓦の中心には一種の飾がついてゐる場合が多いので——この



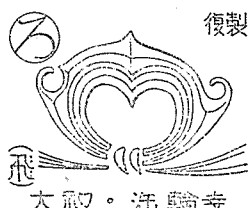
第九十九圖

飛鳥奈良時代花凡  
中心飾十六種

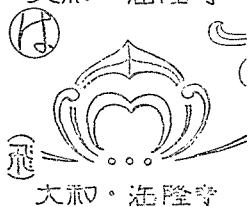
大正十三年十一月二日



(飛) 大和・法隆寺



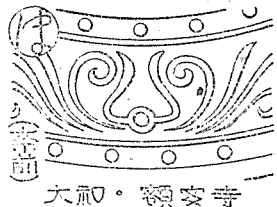
(飛) 大和・法輪寺



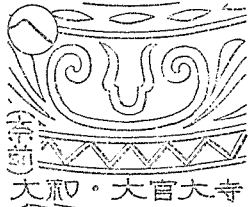
(飛) 大和・法隆寺



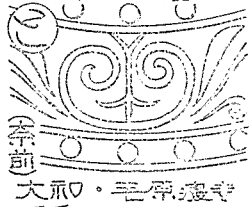
(宗前) 大和・法隆寺



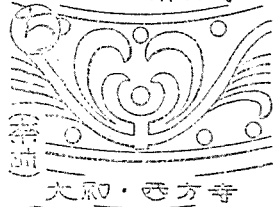
(宗前) 大和・額安寺



(宗前) 大和・大宮大寺



(宗前) 大和・毛野遺寺



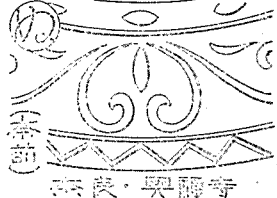
(宗前) 大和・西方寺



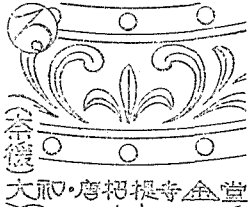
(宗前) 大和・法隆寺



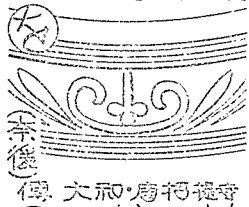
(宗前) 法隆寺金堂  
内玉厨子  
窓窓



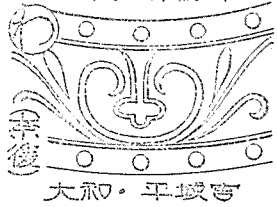
(宗前) 奈良・興福寺



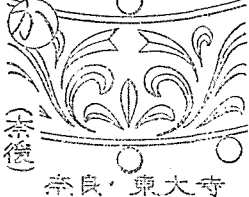
(宗後) 大和・唐招提寺金堂



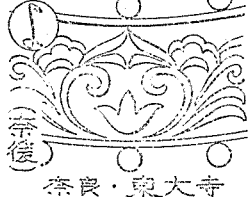
(宗後) 大和・唐招提寺



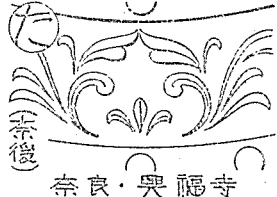
(宗後) 大和・平城宮



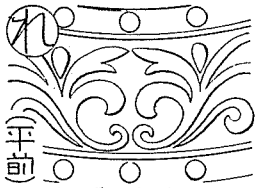
(宗後) 奈良・東大寺



(宗後) 奈良・東大寺



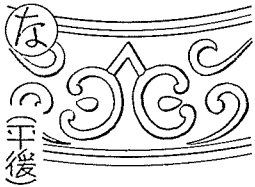
(宗後) 奈良・興福寺



平前 山城・平交宮



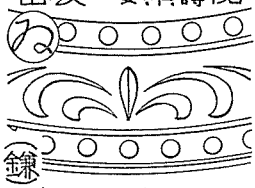
平前 山城・平交宮



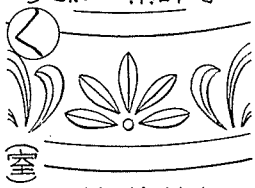
平後 山城・鳳凰堂附近



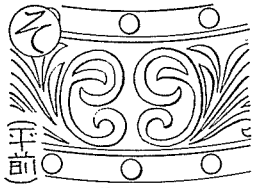
平後 山城・空樂壽院



鎌 大和・藝師寺



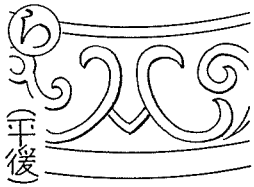
室 紀伊・淨妙寺



平前 山城・平交宮



平前 山城・平交宮



平後 山城・六勝寺



鎌 大和・唐招提寺



鎌 大和・金峯山寺



棟 山城・伏見城

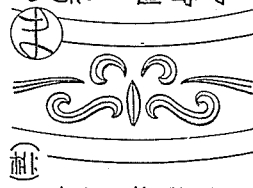
第●百●圖  
平交より桂山に至る  
花凡中心飾十四種  
大正十叁年(癸)十一月五日

花凡中心飾此変遷は、別に詳説を志すも、此等此二圖で充分明らかであらう。即ち左上から右下へは順に觀ていくと、飛鳥時代此一種此飾りが源となり、時代が新志くあるに連れて少志づつ變つて來て、遂に墮落志て了つた此である。蓮花を中心におく此は遺物からは鎌倉時代から此様であるが、變つていくうちに自然に思ひつた志考へられぬ志もい(の・お・く・や参照)

不詳復製

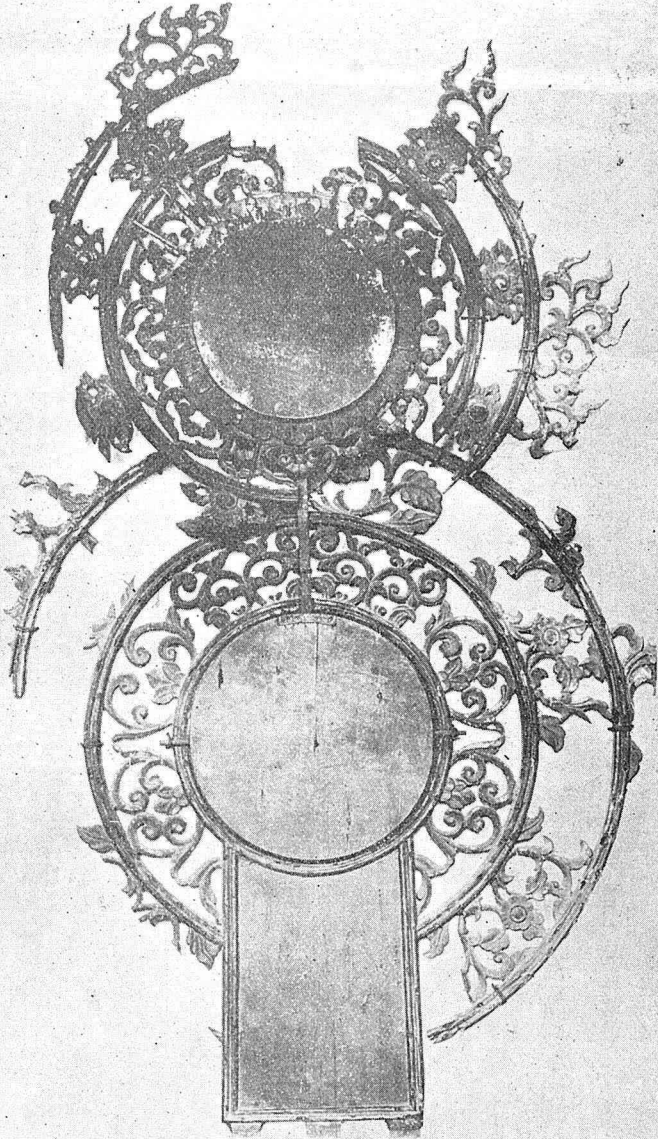


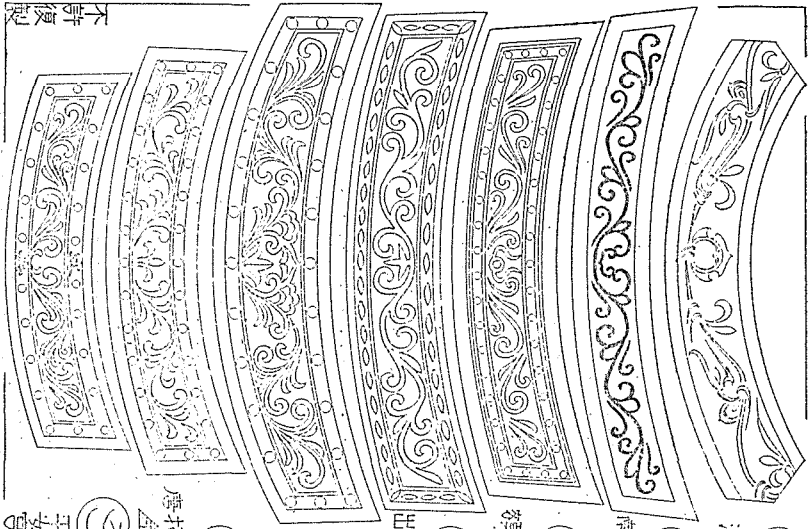
大和・世尊寺



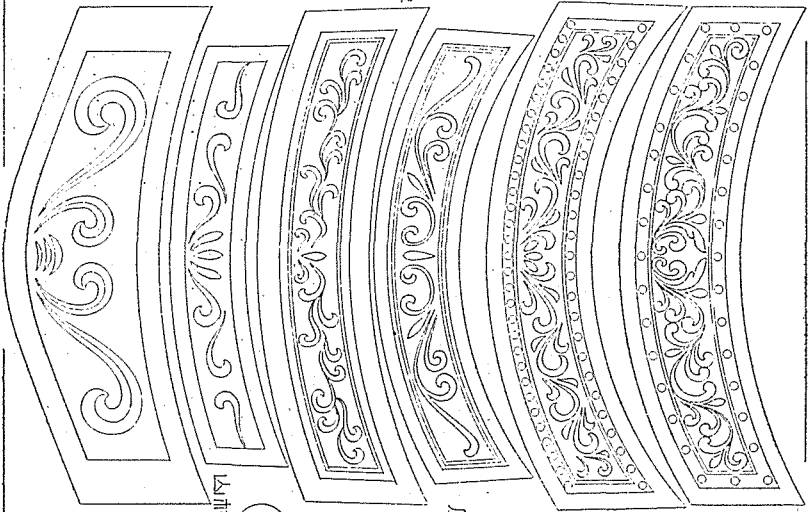
大和・沓隆寺

第百圖之貳 法隆寺藏背光





① 法隆寺  
 ② 南池草寺  
 ③ 額安寺  
 ④ 出所末草  
 ⑤ は  
 ⑥ 卑  
 ⑦ 唐招提寺  
 ⑧ 平安寺



⑨ 平安寺  
 ⑩ 海鏡寺  
 ⑪ 鳳凰堂  
 ⑫ 出所末  
 ⑬ 山門殿寺  
 ⑭ 大徳寺二門

第百〇壹圖 天衣・唐草花凡十參種 大正壬辰次五 至角參の體圖

事は初めに斷つたが——時としては唐草が一端から他端に及び、又は同じ様な文様を繰り返してゐるために、ごこが中心か不明なものも可なり澤山にある。こんなのは飛鳥から現代迄廣がつてゐるので、重弧紋・四半紋・鋸齒紋の如きは其の二三の例である。唐草には其例が多い。

中心飾の一つの面白い例は曩に一寸記した蓮花唐草で、平安後期に發し、鎌倉時代に入りても初めの内は尙ほ其繼承であつたが、後に中央の蓮は變じて菊となり、左右の唐草は浪に變じ、そこで菊水模様が出来上つた。扱て夫れが次の室町へ入つてからは、無論其まゝのもあつたが、また一方菊が消失して浪許りになつて了つた場合がある（安樂壽院）が、此の例では瓦當を其全長に沿ひて浪線が一本通り、上向き又は下向きに區劃し、其内に平行曲線を描いて浪を現はしてゐる。だから全瓦當に互ひ違ひに上向き又は下向きの浪がかいてあ

る丈けで、勿論中心飾はない、此の浪が漸く拙くなり、遂に現代の棧瓦瓦當にみる如き繪畫的の波紋になつたのである。だから此の場合には、初めは蓮花唐草として立派に中心飾のあつたのが、後には波紋となつて中心飾を失つて了つたので、當初に夢想だもしなかつた全く別種のものに成つたのである。蓮から浪への變化は少し亂暴かも知れぬが、かう考へて考へられぬ事もあるまい。

又同時に同一の文様が、若干の間隔に或は相接してついてゐるため、中心飾も其他も全く同一のために全きものと判るが、若し夫れが破片だと何所が中心か見當のつきかねる場合が多いので、第九十八圖⑬・⑭・⑮・⑯・⑰等はこのれに屬する。此れ等は同圖⑱・⑲・⑳等とは自然別扱にすべきである。

時としては大袈裟な中心飾を置かずに、たゞ僅かに細工をして中心を現はしたのもある。例へば

密接せる劍頭紋の中心のもの丈け少しく巾を廣くして其中心に縦線を引きて完全に縦に二分し、此れを以て中心を現はしたるが如き(大和藥師寺、鎌倉時代)、或は珠紋の並列の中心を示すため、其下方に更に一珠紋を附して、「」形としたるが如き(山城綴喜郡當船、岩船寺、鎌倉時代)、何れもこの例であるが、斯様なのは手に取つてこそよく見えるけれども、屋根に上つてゐては中々判るものではない。だから結局こんなのは何だかたゞ物好きに中心を現はしてゐる様な氣がする。後の例を梵字にひきつけるのは餘り考へ過ぎであらう。

### 瓦 當 文 様

花瓦の實例亦無數であるから、これもまた疏瓦の例に倣ひ、忍冬・蓮・寶相花・寶珠の各唐草文様に就き數例を擧げて説明を加へ、最後に劍頭紋の據て來るところについて憶説を述べておくことにした。初めの四つは研究資料の提供のつもりだし

あとの一つは餘興位の程度のもの位に思はれ度い。

### 一、忍冬唐草

第百〇一圖に十三種を示しておいた、以下此所には此の圖版の各圖に就いて一々記載を試みるのである。

⑩は法隆寺出土の飛鳥時代に屬すと公認せられてゐる有名な瓦で、便化された一種の中心飾から左右に勁健銳利な唐草が出てゐるが、中心飾は眞の中心にはなく少しく左により、從て左右の唐草も亦相等しくない。のみならず部分部分を比べてみると可なりの差があるが、全體としてはよく纏まつてゐる。此の種のは敢て法隆寺のみからでなく、法輪寺・熊凝寺・四天王寺等からも出る。其強さと銳さに於いては當代獨得で、一見直に時代の鑑別が出来る程特殊のものである。但し同じ型でもつと其性質が軟いのは奈良時代になつてもま

である。

以下奈良時代前期の例を三つ掲げておく。

②は嘗て私が南法華寺(俗名盛)(阪寺)へ行つた時、同寺

所藏のものから作つておいた招本から描いたものである。だから形は甚だ拙くてきたないが線の意味は大して間違つてはゐぬつもりである。前代に

⑤の様であつた唐草は奈良時代に入りても、尙ほ依然として其式であつて、たゞ形が少し軟かになつたのと、大分變化して——といつても原が夫れから來たことは明白であるが——③・④・⑥等の如くなつたのもある。そこで③は忍冬は勿論忍冬であるが、奈良後期の優麗な唐草の原型をなしてゐるのである。

④は⑤の尙ほ少しく軟かになつたものである。

南法華寺のゝ場合にありては、二つに分れた卷鬚の間に芽又は蕾の如くであつたものが漸く退化して——併し文様からいふと進化して——一種の細

い「薙刀酸漿」の様な形になり、中心飾また進歩の跡が見える。其上に周縁と唐草帯との間に珠紋帯が出來たのは注目し値する。此の珠紋帯は——疏瓦では現代まであるが——花瓦では鎌倉迄は確かにある、夫れから後は一寸氣がつかぬが、或は室町には殆んどあるまい、桃山になつては無いと斷言してもよからう。

⑥は反て③に近い位で、中心飾も唐草も③程洗練されてゐぬ。④が忍冬から來た事を承認せぬ人でも、これなら忍冬起原説を肯定せぬわけに行かぬであらう。唐草の性質は餘りうまくなく且つ素朴である。

周縁内側の珠紋は上下から押し潰した様で、其形は算盤玉に似てゐる。斯様なのは大官大寺・興福寺・加守廢寺(大和北葛城郡當麻村大字)(加守)(廢龍峰寺未詳)等より出土のもの何れも此の式である。圓ければ珠紋と言へるが平たいのだから何といつたらいいか、算盤玉紋





の瓦に於いては、中心飾は益々發達して完好の域に達し、其の兩方から唐草も隨分にいゝ形になつてゐる。中心飾の直ぐ右又は左に唐草の先が三つ循環の順序に配置されてゐるのを見るであらう、これが完全の圓をなす如く並べられると、平安鎌倉時代の餓鬼瓦が出來上るのである。前號に巴紋の起原に就いて想像を記したとき、其の發達はまた別に考へられると書いた(第一一頁下段第十五行より第十七行)のは即ちこれのつもりであつたのである、けれども矢張螺旋模様から考へた方がよささうである。

㊦は中心飾も唐草も何れも㊢よりずつと簡單であるが、優美のうちにつよい所があり、瓦としては寧ろ㊢よりよろしい、恐らく唐招提寺金堂創立當時のものであらう。唐草としては此れ等二つが先づ頂上である、即ち此の期に於て他の例と同じ様に空前絶後の發達をして、次から峠を下り初めたのである。

次は平安時代前期

㊧の中心飾は古い割につまらないが、其の上下珠紋帯の間に左文字で「左」兵とあるから、これは左兵衛の建物の屋根に乗つてゐたものだらう。古いところでは㊨にも似てゐるし、勿論㊩・㊪等にも交渉はあるが、これ等に比べると唐草は大分に弱くなつてゐる。

㊫の中心飾なる相對葉紋は第百圖㊬の仲間で、第九十八圖㊭第九十九圖㊮の如く見ゆるが、夫れ等に比較すると軟かで、殊に其兩方についてゐる唐草は充分に優美の性質を帯びてゐる。

㊯は割合に確かりとしてゐる。此れと同じ様なのが河内の國府の附近にある東條からも出土してゐる。假に㊫を㊯の直系とすれば、これは㊦から來たと思つて差支なからう。

次に同後期の例を一つ。

㊰はつまらぬ瓦である。花瓦もまた平安後期以

下は感服出来ぬ、この様なのは奈良模様の墮落したものである事はちきに領かるゝであらう。後の時代にはもつとひどいのが出て来るが、此れは當期に於ける無能貧弱瓦の見本になる。

#### 次は鎌倉時代の例

②の中心飾は第百圖の②を描くしたもの、同じ時代ではあるが、二つ比べると此の方がどうしても下である。其上左右に出た唐草はすつかり力がぬけ且つ出所もまづくなつて了つた。併し當代のは總てがかうではないので、中には頗る上等のものある事を忘れてはならぬ。

#### 室町時代

③は三つ上の海龍王寺瓦の中心飾の外側を形作つてゐる兩方の上を向いてゐる葉がとれて、中心にある三小葉が發達した様な中心飾をもつてゐるが、これはさう考へずに蓮花紋から來たと見るべきである。だからほとんどは次の蓮華唐草に就いて

記す時に讓るべきであらうが、一寸手元に適當な例が見當らなかつたので此れにしたのである。

其の中心飾の左右に出てゐるのは、蓮花唐草を集めた第百〇二圖に澤山あるから、この點からいつても蓮の仲間に入れべきかも知れぬが、其實こんなのはどちらにしても差支ないのである。此のことに關しては尙後に一言するから、こゝでは略しておく。そこで今この唐草を①・②等の簡單にされたものと考へるのは決して無理ではない、さうすると兩端の一つづゝのか反對になつて中央に向つてついてゐるのは、瓦文様の意匠が最早圖案家の手を離れて職人の方へ移つてしまつた事を物語るもので、唐草の意味も何も判らぬものが意匠したのが明瞭である。なせなら、この兩端のは中央から同方向即ち外方に向ふのが自然である、然るにさうせずして内方に向けたから、全く別種のものになつてしまつたのである。

尤も葺き上げて了へば疏瓦で覆はれるので隠れるから、拙くても悲観するには當らぬだらうが、かうやつて近くてたゞみると一層ない方がどの位いゝかわからぬ。

桃山時代

㊦は中心飾を㊥・㊧等の簡單なものと見るがよからう。即ち此れ等を簡單にして瓦當一面につけるとこれになる。㊨の様なまづいものをつけるより此の方がどの位いゝか判らぬ。

序ながら瓦の下縁がこんな風に膨らんで來るのは桃山以降である。第九十八圖の終りの二つなる㊩・㊪の如く、其下縁が外擺線の様になるのも亦此の時代からの様である。

\* \* \*

㊫・㊬等は先づいゝが、他のを忍冬唐草の中に入れるのは不都合である。といふ異見が出るかも知れぬが、かうやつて並べてみると次第次第に

少しづつ變つていつたで見られるだらう。事實はさうでなかつたかも知れぬが、さうと考へても大して不都合ではない様である。だから夫れ許り單獨に見ては到底さうと思へぬ㊭の如きものまで此の内に入れておいたのである。